往生要集の理義やすらかに正旨密意稱名の眞實を說給ひしかば担通上人の智德月々に盛んなり爰に河越淨蓮寺といふ淨土寺有りしが百年以來廢寺となり妖怪據棲て雨の夜秋の淋しき時は白日といへども旅客を魅惑す素り人里隔し野寺なり智德有と聞へし俗數多の弟子ともに住職として移れども二夜と宿せし人なし領主は瀧本但馬守侯の御領なれば勇猛の士見屆の爲彼寺に行向ひしに或は禿頭にせられ或は其身强勇にして敵しがたき士は其妻子に祟り不時の異變必ず有りける此方より攪鬧ねば渠より何も障碍もなさず偶他國より往來の旅人を刼し其寺へ行き宿する者は必ず魅す格別災害となるといふ程の事もなければまづさわらぬ神に祟りなしの諺のごとく其儘にて打捨有けるが頃日は彼妖怪頻に障碍をなして近鄕の小兒を取かくし旅人のみにあらず近村の百姓田野に出て耘り耕す者を魅し惑すゆへ妖精退治下しおかるゝ樣と瀧本侯へ訴へ願ひ出けるよしを瀧本公御伺として新館へ御入りの節御伽に侯じ御咄有ける君與せさせ給ひ下戸と妖精は世になき譬へにいふ想ふに狸狐の人棲ぬ廢寺に據おのが生得の魅怪を拭ると見へたり何ぞ事むつかしげに武士の討手をつかはすも鼷鼠を擊に弩を放つなり是は佛法の不思議にて伏し靜るこそ然るべし若し怨靈執着古物の精などの怪をなすぞならば有德の名僧をつかはし伏し鎭るとは武士にも勝る討手なり幸ひ担通智識此座に有こそ幸ひなり和僧徒弟のうち其德有る沙門を妖怪やしきへ遣し退治せしめられなば百有餘年の間其土地の悶者將來旅客の幸ひ自ら

其近鄕まで賑しかるべきなれば上人の德も弘り今に始ぬ佛法不思議なれば事就に於ては瑞山も獸ぶぞとの嚴命列席の諸侯御伽の歷々もさるべき理も有りなむなれ共目に見へぬ魍魎殊にむかしより細素も手に餘りぬる妖精公方の御度量に思しくらべての御難題是は上人御退辭申させ我らが家中の若者共のよき膽燎にこそと列位商議區なり担通上人諸侯の御芳志は感佩奉る事なれ共台命の嚴なる末世澆季といへども弘法不思議の衰へざるを朗に示すの種となる妖魅の紛し貧道果して其怪をなす由緣を探り再び人を惑し鬧しもふさゝるやう仕るべしと一議にも及ばす容易にて領掌御うけ申させらる上は只顧活僧々々と仰られ御機嫌よく入らせられける諸手伺候の人々餘り麁忽の上人哉假令其手段有りとも及ばざるげに告ぞよけれ否々文らぬ所が出家なり。否文も詔ぬも功成るときは可尾を出したらば妖精本躰敗なりなど噂とり〳〵なり說尖より上人御館より下り知鑑和尙へ書翰を以て今般は祐典功をあらはすべき幸事有りか樣〳〵の事なればいそぎ河越の妖怪やしき淨蓮寺へ行向ひ其怪をなすは何なる物ぞ朗に見屆て一念凝滯して迷ひし者ならば解脫せしめ邪魔障碍をなす物ならば明王の利劍に斷切するか縛の索に綁るかいづれ再怪をなさゝるやうに粉骨し遣妖精を鎭なば沙彌が手柄のみならず担通が譽當宗の奇瑞再びあらたにして忝なくも上の台慮にもかなふ事此一擧に有り力よや〳〵祐典と勘當の弟子へ書翰を下し給わる本望今此時善は急け今夜河越へ立ちこへ見屆て吉左右告奉らむ幸

ひ哉五月雨霧間なき梅雨ぢめり怪魅の隆ごさむなれ面白しと花見遊山に行くごときの有樣智鑑師も驚き入り告げ越たる担通の大膽是を受たる小僧めが不敵嗟可畏那厮這厮かなかゝる光景ならば果して濟事と智鑑師も何等の心配もなく首尾よくいたせ出かしたりと仰せを聞き只一人廢寺へ逝むかふ十二歳の石勝凡人ならぬは這一回にも人々舌を巻て驚きける却説はる〳〵と簑笠に雨をふせぎ松明打ふり身に携は念珠ばかり軒傾き壁おちて方丈廊裏法堂倒れしは往古は天晴の伽藍地と見へぬ中にも本堂と覺しきは板敷は彼方此方朽損したれど雨はもらねば是に安座し燃すさりし松明を雨落の砌におき破扉を燒添て徐に念佛しおはしける須臾して足音高く入り來る物有脊は七尺ばかり頬四寸樽の大きさにて眼三ッ八寸亘電光の如く手箕をひろげし如きを出し上人御肩にても揉按摩いたし申すべきやと三尺ばかりの口を開き笑ふ師夫れは御馳走なり肩凝りて心悪し其大きなる手にて抓賜らば快かるべしと諸はだ脱て安坐し給ふ後へ廻り抓立てる冷凄氷の如し又頸に而血に染面の皮剝れし禿道の薬に蚰蜒さま〳〵の色なるを三十條ばかり盛て御菓子奉らんと鼻の尖へ是何より好物なりと首を低蛇を喫つきにかゝり給ふとひとしく蛇飛反りて禿取體に取つき〳〵纏つく禿は消て首なき骸ばかり前後に取りまわして異口同音に嘔哥し躍る口は腹に有り舌を噴又臭き血を吹かける師も息を吹かけ給ふに妖魅が吹血は却て己が身に噴反さる是を始として三回の悪鬼九頭の大蛇三尺ばかりの石龍螭蟒有るとあらゆ

る異類異形亦は美女千變万化の妖精秘術をつくして魅惑せんとすれども一ッとして術ならず擧折かれたり夏の短夜はや東方白き頃一人の山伏師の前に合掌し再立て拜し再ひ頭を地に低珠數ふし揉是大明王無其所居但住衆生心想之中と唱へて合掌す祐典子も合掌ましまして可不可の冥加至極日頃の願成就仕りぬおそれながらかゝる權化の大知識とも存し奉らず妖術邪法蠻夷鬼畜の外道を奇とし妙と想ひ順ひしてそ悲しけれ即今明王い冥助に漏れず忽那邪法を放下し正法眞實法に歸命なし奉る有難さよ我誠は幽靈にても妖精にてもなく候凌雲院龍海と申す修驗者に隨し敖達坊と申す山伏にて候此廢寺むかしより變化棲しと聞く近曾師範龍海此所へ來ると見届け候處古狸集まりて怪をなすなり即時に棲所の古狸を擊殺し已れは昔に增る怪異をなし此事募り今にては害をなし而も敵し難き事嚮の古狸などの類にあらず容易に退治なり難きよしなり然るに今宵師此所へ來り給ふ事龍海よく知覺悉僧に命じて其手段を試み來り明夜必ず我逝て那厮を斃んと其魅無術を示す我望む所と師を俟百計万行勞して功なし術盡てせん方なく利劍にて飛かゝり師を刺と企てしが其手を下さゝるうち師の首の上に靈劍有て右に揮ひ左に拂ひ光赫々眼を射る想ふに宵に百術すべて破れしは擧這光明に射られしなり眼を睜て覗ば師の容なり目を閉て心眼を以て觀念不思議や不動明王の尊影なり素より明王には命を抛ち信仰なし奉る事卅

年來今此奇瑞を拜みし汚れ穢れし邪術の膓淨き御法の眞の水に浣清め則ち今大上人の御弟子となり給仕奉り度所願此値遇偏明王の御合せなり偏に願ひ奉ると涙を流し低頭合掌したりける上世は閲當時の有難き事共なり祐典しも奇特或る人を懺悔に舊き惑を改め今正法に歸する善哉々々しかし我れと沙彌修祈中なれば御房にも今年より七ヶ年の間諸國を經歷し再び來り候へと御十念を授け給ふに敎達深く歸依信仰し却説照魔折妖歸正の呪を修す祐典子は念佛十篇高らかに唱へ給ふ魔障を破る法別になし只願此稱名南無阿彌陀の外なし此山伏敎達後祐天大僧正八人の知識法脉相承の其一人淨譽信達上人とて勝れし德智有し中は後篇にくわしさて妖術敗れ術者歸伏せしゆへ此淨蓮寺の怪は祐典子の今宵一夜の手段にて再ひ障碍にて近邑隣郷佛菩薩と尊みける

祐天上人一代記卷之三終

祐天上人一代記卷之四

潮音禪師祐天上人問答幷龍女出現し化粧を看破られ

拔苦利益を蒙る事

嚮に担通上人の勘當御免しなさを深く悲しみ智鑑和尙を以てさま〳〵歎き給へども憍慢我執に比しさの御叱り强く一つの功有の時是を宥し給はるの心なれば其功をたてなむ便を待給ふ折から渠河越の妖怪を見届よとの師命を聞き給ひ何をがなと思ひ給ひし折柄といひながら熟思ひ量るに沙彌修行の事なれば小智のうかゝひ知へきにはあらねども出家沙門の變化妖精の正躰を見届ん爲廢寺に至る事は武門の若輩勇氣を以て退治するなど手柄とも成へきなれど狐狸の妖をなすなどの些細なる事見届課たる所さして佛意に合ふ事とも覺へずたゝし一心轉動する軟弱臆病の下根を撓給ふか夫は禪法なとの活達頓機を初學の階とするの類ひはさる事も有なむかもしらす當宗の沙彌をかゝる中にて覗給ふは畢竟祐天は大道遮欄を沒し歩を進て直ちに兜率に登るの徒弟になさむとの師の鑑定なるかと心踟躕して安からず何はとまれ角まれ師命なれは逝ずんば遂まじとまづ成田山を遙拜し一心不亂に明王の擁護を祈念し給ふ不思議や頭上に光明赫々

として異香又芬々たり忽見靈劔一振首の上に有て九霄に昇り河越の方へ飛行し給ふ扨は明王の御加護疑ひなしと膽に銘じ智鑑和尚へも廢寺の怪見屆の事たしかに御うけ有り竟に其妖精を退け給ひしかば担通上人より此よし新館へ言上の處今に始ぬ奇驗頼母しと台慮殊にうるはしく何の手段もなく念佛を以て魔障變化を却避し實に其祐典は念佛の大行者なりと君御身近く召され御懇の御意のうへに都智恩敎院へ未世念佛の大行者祐典事宗門の潤色もなすべきものと思し召の段御吹聽により都にて忝なくも奏聞のうへ推叙の權少僧都祐天と典の字を天と革め下し賜ひしかば担通上人の恐悦冥加に合し祐天僧都の譽是より高名旭の昇るが如く信心の僧俗結緣の爲め十念を授かり度由を願ふ人々毎日〳〵群集し市の如し担通上人歡喜の餘り館林芳樹寺にて祐天和尚五十日の法談諸人結緣として談議始りしかば貴賤老若僧俗近郷はいふもさらなり隣國へも次第〳〵に聞へ千を以て算ふべし爰に其頃潮音禪師永平寺の會下に其右に出る僧なし一山快活國師など〳〵もてはやす英物なり折しも上州檀林へ下り合せ渠祐天師の智德を諸州各府に稱譽震動する事千百輛の車の沙礫上を轔がごとし禪師微笑し這小僧避地邊鄙の一文不通の族を放下師誕笑同事の荒唐々動觸ちらし法談などゝは天殺禿頭斷是も可憐時至り今宵斷絶ひとあわふかせて愚昧の班叢の眠を覺させくれんと徒弟兩三個引接て淨念寺說法の場にいたり見るに豫て聞きし物かは其群集滿汐の渚におし來るが如くにて寄つく事なり難きを辛して高座に近よ

りまづ其勸化を聞くに佛法の大意と云は決定して往生し疑ひなく安養淨土へ至るより外なし八宗九宗いづれに愚はなけれ共末世下根の凡夫銘々夫々の家業是れは今日親妻子を養育の基なれば夫を怠りては身は立ず智功を闘して我人ぬけ目なき時勢なか〳〵事むつかしき難行修行在家凡俗の迚も及ばぬ事なり故に大慈大悲の高祖圓光大師末世濁惡の凡夫うかみ難き執着疑念ふかく罪かさなる女人は云もさらなり三熱に苦しむ魔界より惡獸鳥類鱗虫のたぐひ其外非常の草木森羅万象悉皆成佛疑ひなく往生の素懷をとげ九品蓮臺にやす〳〵と至る事は何のむつかしき事も勤行苦行に身心を苦むる事もいらぬ只顯一心を抛て阿彌陀如來に此身をまかせ奉り南無阿彌陀佛とさへ唱れは忽ち如來御來迎なり極樂淨土へ引接なし下さるゝぞかゝる易行の廣大無邊の大功德此のうへもなき稱名かへす〳〵もよきひらみずに念を專に助け給へ有難や南無阿彌陀佛〳〵唱へ奉る輩現當二世此世から安養淨土の大光明のうちにやす〳〵と座する事なり南無阿彌陀佛〳〵と御十念を授給へば異口同音に唱る稱名の聲空闇して大地も震動する計なり潮音禪師進み出で御坊へ尋申事有り唯心の淨土己心の彌陀最も尊き佛性は身に備へたもち居て照々と赫く明德我人すべて他に求め尋ぬる物にあらず心眼をひらき己々が所持せし佛をすてゝ西方十万億土むかし〳〵有たか無か書遺し云傳へたる書物などを的にして他外を探して渺茫もなき事を狼狽まする事こそ淺猿けれ見性成佛己れが胸の中の本來面目をば見出し他を賴まず自

己の工夫悟りえて安養淨土に往生自在なりさあらぬだにかゝる避地の愚昧頑にて義理も道もさらに辨なく習氣の强欲は無二無三白地に言人類に遠き無慚愧不肖の徒に甘言を巧にして誘に云木に餅の生旨滋原味の引導何事ぞや今より和僧心を醒し自威嚴衆生とゝもに拶て栴檀林に入り直指人心見性成佛の果に至るべし一盲衆十盲をひく見るに忍びず焦土に甘露水を降すなりと大鵬小雀を攫の放言祐天師莞爾として曰く夫天地造化の廣大なる陰陽不測の妙用其うちに生する有情非常とも其稟性區區にして蓮葉の圓き芭蕉葉の長き松の葉の細き如く含靈の長たる人も海外西洋の蠻國異狄天地の偏氣をうけて生ずる者は形容も異にして大ひに心も變なり日本の内にても夫〳〵の風土の同じからず急速寛優千差万別のひとしからざる其機に應じて化度し普く弘く速く通曉し卒爾即時會得して先歸依するを善緣として竟に佛果に至らしむる事何れの法にても融通して尊信渴仰なす誠の心より自己のその持授の明德と合躰和合せし所が成佛なり至愚濁惡の僻地の田夫野婦を勸むるに禪師などの至れりとし給ふ慈母を子として賊殺し執着を斷切なさしめ一刹那に天に生せしむる活達を說聞すとも只顧怪しみ迷ふのみにして夢地をたどる如し是は爰に着する事を深く禁しめたる大悟なれば容易に說聞すべき所に非す自得切差の功を積て以心傳神心は神なりの高論にて心身を凝し頭香手香に肉身を焚燒かし荒行難行し他力を捨て自己の本性をば見出さんとの千辛万苦粉骨碎身して億兆に纔一人無量壽佛の世界へ

游び給ふ禪師すら我修行し給ひし法に泥み愛し拘り人類に違しなどゝ見限り看破し給ふ此土地の愚頑の們に見性成佛不生不滅直指人心の及び難き事を容易勸化課られもせむかとの度計自己の難行功就りて今安樂世界に自在なるを標準として天竺から雨が降る勢田の橋の下から龍宮へ往來が出來ると思ふている族も直に了解するとおほすれば餘程の通計阻なり其悟道發明の禪師赤だ法を愛し着して他の法にて成道するを拒きらひ給ふ法愛廻轉せられて罠に罹て脫となりたるを自ら知らず正法念經の瞽者探象の譬象の手足ばかりを探りし盲己が採抓し所を象と心得全躰を知らぬ譬則貴僧の今の癖見是なり毘盧遮那佛も佛頂尊勝も過去七佛も十三佛の次第も地藏本願經隨願往生經喩伽論の本說を說一見阿字五逆消滅の功德を示し眞言秘密の咒にて諸病悉除の加持せし僧の神符一つも功驗なく油桶に入れと唱へて咒せしが嫂が咒文を授りし難病人癈人本復癒治せざるはなしと聞是何奈とその理を究るに渠媼一心決定して疑念なく精神朗に油桶にて大焦熱の罪人も淸涼池の功德末に溶するが如しと尊信せし所毫髮をいること透間なし我源空大聖人の易行念佛の功德迺に此塲なり愨に不三不四の未了より無念無想の一途不亂の念佛信心誠稱名こそ極樂往生現當二世安樂疑なし今試に禪師をして貧道にかわらしめ今此許多の蒙昧の徒を目下に信心を凝し忽見性成佛悟道發明なさしめ給らば誠に大導師なり八宗九宗盼劣なければ何れの道から成るとも登り得て都卒内殿に入り眞如の月を眺なば高き事なり暫時

拙僧憩休もうさん禪師我に代速此愚俗を示し給へと頓覺即智能辨流水利害分明洪水の瀑に落るごとく責かけ〳〵説つけられてさしもの潮音氣を抑かれ醉るが如く一句一言の返答も出されば講中徒弟子法問に負しぞ三衣を剝よと立かゝる潮音は大きに周章て逃げ出すを大勢門外迄逐かけ剝にかゝる潮音の弟子僧下部には狼藉なる溢れ者共と喧嘩に及ぶ講中云いや狼藉は少しも不仕是は法問に負たる方の三衣は勝たる方へ申預る法式の例なり祐天負なばそれへ御渡し申なり今より參らすとも後日祐典を言詰閉口させて法衣を取返し猶祐天が三衣を取り給へ曾て法外狼藉は仕らず御渡しなくは本山より貴院の御名を申出し御本寺へ表向京都智恩院か增上寺より相屆申べし左在ては中双一山中諸國末寺に至る迄露顯いたし氣の毒なり只今作法正しく御渡し候が却て殊勝の御事にて人々其老實を譽申され少しも御耻辱にあらず名將も合戰の度々極て勝にも非ず勝敗交々定る事なしと理非斷し分説本山の沙汰に及ばゞ公の場へ陽に醜聞をうしなふなりと是非なく法衣を脱で渡されける却説祐天師今宵の手柄滿座始終を見聞せし事なれば聽衆一統或は感じ或は勇み歡び震動して座も滿數百人の參詣退散の有樣潮の落くるがごとし爰に潮音はじめ其徒弟幷に日ごろ參禪し居士號など免許うけし禪學信心歸依の旁多しわきて當所安中の領板浦佐渡守侯は禪學を信し其藩士潮音和尚の弟子數多なり今宵の蹺蹊を傳へ聞きやすからぬ事哉渠小僧果譚風話の健翫に任せ正實の俗習をはなれし清淨水を淤泥にて汚せしなり法式ごか

しに法衣を奪しは狼藉の溢れものなり其儀ならば祐天歸路に剪經し其報を思ひ知らすべし送り來る奴原二三十人も有べし那厮追ちらし祐天を取こめ法衣を取歸し亂根に打擲し片息になして再説法の場へ行事叶ざるやう脛腰の骨を碎きなむ事爽快事に非ずやと我慢不敵の土民藩士に口利力量劍術人もなげなる血氣の溢もの僧俗百餘人得物〳〵を携へ沼田と安中の堺なる山の麓の森のうちに埋伏し祐天師の歸りを待伏したるぞ危かりける事共なり却説祐天師は講中兩三人送りて歸り來給ふ路安中へさしかゝる頃は仲夜最中の月中天に澄わたる虫の聲〳〵も面白き氣色俄にかわす暴風迅雨沙を吹上け一天黑闇に電閃ひまなければ師も送りの兩三輩も路傍の椋の大樹の底に立より霧隙をまつうち兩人箕笠借り參らんと兩人は立行戻久しく消息なければ尋ね參らむと是も立ゆく師一人殘り夜は三更も過たる山中心細くも待ち給ふに雨も霽ゆき月の色再さやかに雨後の月常にまさり心を澄しおわする所へ夏秋二八ばかりの上臈こゝら目なれぬ其さま月にまばゆきまなかたち恒娥月宮殿を天くだり來りしかと思ひかけざるさま心得ず見給ふに上臈師の傍に寄り添て妾は宵に上人の御法説せ給ふを有難く毎夜〳〵聽聞に詣參る女にさふらふ只今の俄雨にともなひし者共を見うしなひ心うく亦怖しく立もとり候うち是に上人渡らせ給ふに力を得ていらせしなり程なく供の者も尋ね參るらめ一人淋しさのまゝ御身ちかく參りしなりと馴々しげに寄り添に師何の心もつかず扨々夫は心憂思ひ給わんまかし此路は一條なればやが

て御迎の人々も是をこそ見へ申さむなど拶挨し給ふ女云枯木寒巖に倚て玄冬暖氣なしといふは内心につゝみし淫慾を蔽隱す僞り眞人は却てかくの如くにあらず上人はわきて青春の御事驛氏の徒なればとて肉身の事御惑ひなからむや百人歸依する上人に植偶なし妾陋く醜きを厭ひ給わずば生涯君と夫婦僧老のかたらひをなし靈未來かわらぬ心の誠を顯し今指を啖切りて鮮血を以て誓書をかき參らせなんそも發願說法なし給ふ夜より首尾を待ち得しに赤繩神の御はからひ今こそ願を遂させ給はれかし素り些少なれども母の讓り給はりし紀念として黃金三千兩貯へ參らすれば君と夫婦になり是より都會の地へ出現世より如意滿足喜見城のたのしみ婬欲飲食絲竹管絃歌舞の呉樂またよきにあらずやと師の兩手をとりむつれ寄添艶顏のいと耻かしけに紅葉して月に照そふあてやかさ蘭奢のかほり馥郁として天人の影向とは正に是なり祐天子色を正しての給ふ響よりのたまふ御詞の如くむかしも今も國色を人の誘ひ神仙といへども是に魅せられざるはなし況や大凡夫沙彌祐天君があてやかなるうへに生涯快樂を究め樂しむ其貯の黃金を積ての皷笛なれば佛にても魔王にても餓鬼が中を見し思ひ飛つくばかりの事なりいざ速く人來らぬ間に此所を逐電し都へのぼり樂を極んといふ光景なれ共祐天はさやうにはいたすまじ夫をいかにと云に幽顯路異なり期爲君と夫婦になり課らるへきやと上臈駭きし顏色にて上人恠しき事をの玉ふ幽顯みちことなりとは何事にさふらふや祐天云世界に四界を分つ天界陽界地界水界是なり

水府仙宮公主君の婿君は俗說むかし話の水江の浦島か俵藤太こそ古めかしくとも相應なり陽界に佛勅を弘く布衆生を救はんと大願發起せし祐天を公主の婿には近頃齟齬おぼしめしなり蛟鰐將軍電參軍などの部下を催し浦島が子の遠孫にても探し給へ吧々呵々と高咲龍女淚を流し低頭合掌再拜し給ひ活如來ともしらぬ水界南海廣龍王が女にさうらふ禽獸鱗介蟲類までも漏さず救ひ給わらむとの御敎示は聽聞なしつれとも若く盛んにましませばもしも色香に迷ひ給はんかさもあらば七裂八裁八刃々となしなむとかゝる活如來とも知らぬ鱗の淺猿きを大慈の哀愍をもて免させ給ひ苦患を助け給へと伏拜〳〵詫給ふ此蹺蹊を遙に見つけし埋伏の奴原さてこそ〳〵賣僧めが本性見屆たり焚妻くるみに生捕万人に見せさらし墮落無慙の罪を糺せと扳つれし武士槍を捻り惡徒ばら其の外大熊手鋤鍬手に〳〵引さげ湧が如く百四五十人祐天師と上臈を中に取こめ八方より擊て蹴忽見

陰風颯々迅雨驟に至り霹靂一聲山を裂き表に進し十餘人が上に墮けると見へしが擧く微塵に碎け腕も臑も首も分々と成て飛ちると見るに雲中より廿尋餘りの大蛇碇の如き手を出し又十餘人ばかり引抓手肩脚を引き扳き挽き裂事帛を破るが如く電の隙より見れば鮮血空より溢れ流れ碎し骨筋肉寸口になりて地に落ち事目瞬一瞬の際に七八十人餘り盤石卵を潰が如く雨脚は擧血なり泣き叫ぶ聲は雷とともに殘し奴原の魂を銷し膽を碎く

槍刀得物を携し者九十餘人忽ち引さかれ空手の者は助かりしに天地に響く大音にて佛に敵する外道共は今殘ず引裂捨たり殘りし奴原も舉く抓殺す奴なれ共愚昧ゆへまばらく惡徒に誘はれ來りし厮ばらなり先非を悔て自今を慎みか樣成奴に與力せずんば命ばかりは助け得させむ我は南海廣利龍神佛法守護の爲一女子と化して佛敵邪魔を讓ひ念佛の信者を扶助するなりと雲中より喚るにぞ生殘し百餘人の者共は餘りの怖しさに手も脚も痿聾を呑で物も得云ず血の涙を流し兩手を合し首を大地に抛て泣より外の事ぞなき扨漸々雲霽たる雲の内には廿尋餘りの大蛇の上に祐天師は端座合掌しておはしますを見て懼れ慄ふるひ出し命は助けたび給へと人心地もなき有さま祐天御聲穩に人々必ず怖れ給ふな我は變化でも妖精にてもなし又今死せし人々も心たに正しきに歸り候はゞ龍王へ御わび申し命を助け蘇らせ申さん南無阿彌陀佛〳〵と御十念佛の妙なる御聲につれ不思議や寸々分々と碎斷し屍素のとく五躰全身少しも疵なく祐天師を伏拜み〳〵涙にくれて嬉し泣二百餘人の僧俗武士も土民も同音に稱名の聲に山も動ばかりなり大蛇もいつしか素の女龍と現じ傍に合掌し給ふ這迺勸善懲惡の御方便とぞ聞へけるかゝりし程に東方白くまのゝめの旭とゝもに輝きわたる祐天師目前龍神かたちを顯じて守護なし給ひし光景正しく見聞せし二百餘人の僧俗かゝる不思議になどか歸伏せさらむや皆々御弟子となり念佛修行怠らず殊勝成し事共なり

飯沼弘善寺萬日開闢說法の事幷救世觀世音菩薩爾現なし給ふ事

上州館林善導寺担通上人は足利御館の御飯依淺からず有しうへ祐天師の智德を稱美し沙彌より權僧都に昇上し給ひ結緣の談議有し處其勸化の跡是れ迄上人方種々に說曉し給ひても避地至て愚の族諺に云ふ胡椒丸飲なれば稱名念佛も疑ひなから唱へ來たり說法談議いふ物尊き事をふなれど利害わからぬ物なり善事と名の付しに面白ひと云はなき物と心得居るなどされども老實なるは是亦繁花の兒智にはるか勝りし風俗なり此所へ祐天師出給ひて其手段枝葉は避樞鈕を拾ひ譬ば扇の要車の轄人の眼天狗の鼻河童の百會といふ晴曀精粹を耳近ふ理會やうに和解に譯きかせ給ひし故始て有りがたく尊き事ゝ會得信心すきひら見ず抛ちしうへ法問に勝給ひし其理非わかりし光景龍女の奇瑞等云紛云恰も四方に美名ひゞきける爰に又飯沼の弘至寺清秀上人香衣禁色を御免許儀式万端相濟ければ寺格にて夫より万日回向五十日有事先例に任せ開闢より法談議有る事なり同派といひ殊に組寺なれば當時諸人的依の祐天子助力の事を弘至寺より段々担通上人へ賴託ゆへ則ち弘至寺万日開闢の日より祐天子說法有りけるに老若貴賤大群集して怪我人も有りなむ有りさまゆへ警固の人敷棒突出て世話しけれ共門を開や否崩入る勢中々制し防ぎがたく見へける若婦女童子の足弱に蹴瑕など有りなんかと其日の申刻ばかりに祐天子聽

衆に向ひ曰ひけるは各々信心堅固にして日夜の參詣怠らず奇特成事に然るに餘り多人數夜に入ては一入老人童衆など怪我過ち有りてはいかがと心安からず存るなり故に今日は只今一座の終を結願として相休み夜分はしばらく休み候て晝四つ時巳の刻より七つ申の刻を限に止め申すべきよしに講中よりも申され候各々折角信心の施主なればかく斷り申入る段本意ならね共人々に若し怪我など有りてはと是のみ案じての事なりなど懇に會得させ給ひぬさて各々大きに遺念惜懐ながら皆々退散し後は誠に洪水流落のごとく講中世話方後を掃除し賽錢あつめ火のもとを點檢しなど彼れ是れ黄昏も過き祐天子は善導寺へ歸むと弘善寺の役僧方と挨拶有りける所に思ひもよらぬ高座の傍より五六歳ばかりの小兒立ち出て御上人さま御十念うけたく相待居候ひしなり先程は餘りの大勢寄りつきかね候今は人もなし御十念御授け給はれと云に人々いかゝいたして今迄そこに殘り居りしぞ當村にて見馴ぬ兒何國の人の子ぞと驚きぬいや隣村庄屋方へ京より下り居候者上人へ結緣仕りたさにかく大勢の人より後へさがり候と聞人々云扨も〳〵世に行過たる孩兒も有る物かな五つ六つから後世の營とは扨も〳〵出過たる者哉と笑ふいや都には五つ六つにて後世願ひなどは未だ數ならず三つや二つや生下とすぐに死逝など數限りなし後世願ふ小兒が行過き者ならば二つ三つで死るとは實の行過者といふ物か上方と違ひ上州では幼稚のもの嬰兒など死るといふことのなき國か伯叔爺怎麼說と孩兒に言詰られ世智速計講

中世話人一句一答詞なし流石は出家と役僧達驚き入り候老少不定今にはじめぬ事大俗素凡夫神童の討話なし給ふに足らず速く祐天大上人の御十念をうけ給ふべしなど俄耳言たら〳〵祐天子は合掌し南無阿彌陀佛と唱給ふとひとしく滿堂に異香薫じ馥郁として紫雲充滿し祐天子も晝子もすべて見へず羅々たる雲湧起のみなり祐天子まず禮拜敬恭なし慈眼視衆生福壽海無量南無救世觀世音大菩薩と唱へ給へば善哉々々嚮に告し明王倍々汝を愍普く德を赫むと二六時中不動の靈劍は汝が首の上に在て護り給ふ無常の迅速のうち怠る事勿と靈告て救世圓通は都の空ら六角堂へ紫雲に乘じ歸らせ給ひける

祐天上人一代記卷之四　終

祐天上人一代記卷之五

仁木十郎兵衞怒て妾婦歌川を殺事并冤刑の怨忽讎を報事

爰に足利の御塵下應對寄合衆祿三千石の采地を賜り素り管領につゞひて權勢有る家柄の支流自ら御同席の内にても權門の餘力を振ひ每事失言不禮の振舞少からずといへども喬木風災の諺を思ひ概の事は等閑にうちすてゝ無爲にはあれど甚浮雲事どもなり此の十郎兵衞短慮血氣の勇氣熾にして卒爾に事を斷じ退て己か非なるを覺ても是を悔て革るなどゝ云事なく偶〻懇志の士是を曉せば却て憤り辯舌工に前非を文り其說し人を惡計有り姦人なりなどゝ執權家へ阿り讒す此故に誰か那厮が不好事有りと見ても示す人なく疫鬼と誹名して熟話なる者なければ日を逐て不好事增長しけるぞ愚は愚にしてます〳〵愚なりの塲なり有斯うへに荒淫亂行なり其頃松葉ヶ谷に瀨川花魁と聞へしは世に聞へし名娼なり此妹女郎に哥川とて劣らぬ娼にて時めきしが引手數多の其中に渠十郎兵衞が家もと仁木右近將監侯の近習小川某とて優美の士とふかく云かはし哥川も今しばしにて花柳の街を脫て偕老のかたらひをと互に夫を樂しみけるに當春保殿山の花盛にさきの管領畠山道朝入道かの瀨川哥川雨川の花魁を携れ花の花見る花くらべ風

流の女藝者俳優幇間うち混じ日頃に笑を献じ媚をなす列侯の家司御塵下の歷々まで燕席に列參して興を添る其班裡に仁木十郎兵衞も有て追縱輕薄孟浪至らずといふ事なし後には爛醉に乘じ渠例の淫行を陽し瀨川花魁を花の蔭にて强て捕て肉痳綢繆かゝるいかに曉說さま〳〵なれども不旨さあらば只得とおぼさば後難の無やう君の戀々春思まことに有により枕並べむと入道殿に陽とあから薄氷の心づかひなく寬に娛みなば又好にあらずやと愚何れて仰天し媛々是醉中の戲言なり已れ愚なれども太守の手いけの花を折べきや日頃の我篤實をわすれ今一時の戲言の些細を却て誠の心より出しかと思ひ給ふしそ無情なにを分疎わかちなき流石稚幼女といふ物は假令左禮言も云れぬなどゝ狼狽た分說云ちらし鼠の逃る如く跑出けるこそ笑止なれ却說是にも怕ず是非春情をいづれにもあれはらさむ物と騰氣のごとく忙しく娼婦令室の分ちなく追巡る月のまらめる花に映じいわんかたなき氣色も目にかゝらずとある櫻のもとにて花に結びし短冊をうち陰し鬢切せし小女に旅硯取もたせ筆ぢめし打曇りの短冊に物かゝむとする美女あり前後亡跡引とらへ天女まばらく筆採事を止て好告有を聞給へむかしより月は花に歌の連歌のといふ取り合せは古格な延喜式にて時勢風習こと總痴漢獸子の所爲なりかゝる事は放下此好漢と此花の下にて比翼の枕をかわしなば亦月花に歌など咏如きの質朴事と違ひ娛樂天地のうちに比類なし已元來此好遊至て嗜なり只得志を遂させ給へと强て手を取狼藉に及ばんとす少女驚

きおしのけ引のけ右に挑左に拒方總女力ながら泥の如き爛醉なれば兩人して手足を強くおさへ相公かならず胡亂ことし給う己は賤しき河竹の歌川といふ流の女なれど今宵抔の公の席につらなり淫行を擅にせむと流石におのが所作を陽せしなど云はれんも耻し君は歴家の事今強て迫らずとも素より情を售遊女なれば後日柳巷に馬を進め心の儘に興を添へ給へと急逼遁の計言さては聞き及ぶ歌川君か後會かならず誓約を違へ給ふなと辛して此場は遁れし歌川果して這醜漢音信あらば妨をなすべしと盟約小川某に此事を商量す小川大きに驚き是れ必ず事を惹出すべし那厮は今權門の氏族にて勢ひ強く佞姦惡計人を害ふ大毒蟲なり我又執權家の君邊に侍し進退其行跡清廉にして作法正しからざれば身に災忽及ぶ汝とかく互に夫婦の誓せし事露しらは一大事なり決て汝を訪べし箇樣々々にして言脫なば那厮も亡方便て此事破るべしと兩人心を凝し生涯の智を煉し商議は射鵠たれども薄命是と同じ手段せし仁木は十分事濟小川は事破るるのみかは災害竟に身を亡し夫婦白及の霜と銷ゆくゞ哀れなる却說仁木はつかのまも忘れぬ歌川がこと戀々依々として急度思量を巡し松葉が谷歌川とて名たゝる名妓なれば其廓の指揮按撫使の幇間何の伊助とて此道の諸葛武侯と名高き曲者に過分の金銀をあたへ猶此事濟渠歌川を我方へ手生の花と樂しむやうに汝奔走ば谷七郷の内いづれの所にても第宅壯麗なる厦を褒美として與へ其上權門諸侯方へ汝を緞綉家にして繁昌させ望生万端すべて助力しつかはすべし又遊里に

て自由をなす根元は金銀に有渠が身の代雜費は北斗を誘ふ黄金を積べしと頼托するに爭か怡ばざるへき相公高慮を勞し給ふな黄金を抛ち給はゝ必ず事濟べし先其手段はかやう〳〵と一々其展暢もやうを熟談して歸りける却說十郎兵衛は伊助がおしへにまかせ谷の地はなれ板橋と云ふ所に詫住せる老婆有り是れ歌川が母なり仁木嫂に會まづ嫗御前わが志の些少を嫌はず是を受用し蘭若詣となし給へと黄金五枚を扇にのせてさし出す這婆素より皂雕嫂と呼れし强欲無慙の尸饐なれば車の轟くが如き高笑する事少刻がうち無度して大慈菩薩はいか成る慈現にて來迎なし給ひしぞ命にても献つらむ速く來由を聞し給へと滿面喜悅を顯しければ仕濟たりと悅び我武門の事なれば先祖國の爲に數万の人命を戰場にて落させしむる事限りなし此の追福に大善根をなさんと思ひ立しに川竹に沈む女を救ひ火坑の苦患を助けし事限りなし然るに我が親しき士管領家に昵近せしがいか成る天魔の所行にや汝が娘松葉が谷歌川にふかく馴染しが是は若輩の一花さして咎むべきにあらざれど不便なるは歌川なり外に深く云かはせし密夫有る事を聞き若氣とて憤り荒立ては其間夫と云は麾下の歴士なれば竊かに先づ女を勾引毒殺せんと某と云ふ醫師と謀り藥も調ひ手を下す一件旦夕に有る事故有て渠醫師が僕より慥に聞く人の害を救ふが常なる我耳に入りしは歌川は素より母御前迄の幸なり汝に許多の金子を與へむ程に歌川の身の代を抱の親方に渡し娘を此所へ引き取り給へ一日も花街にはをきがたし而後には渠惡縁怖ろしき小川

が縁を斷娘の終身は我又さらに小川百倍の大身へ媒し姥御前は麼下の御隱居さまと榮花氣儘好物つくし極樂世界に娛しませなば誠とに上もなき善根かと思ひつき何と嫂君好ではなひか身の代も是れ見給へ此通り豫備して來りしと三百兩餘り財布より出し嫂に賣弄ければ嫂は手の舞ひ足の踏み所も忘れ竹簀子より倒落嬉ひと娘が眉火の大難とに心も狂亂のごとく相公速く助け給へと焦燥ばよし〳〵我に任せ給へ然らば箇樣〳〵に親方に申べしと金子百兩嫂が首にかけさせ腹心の家來を伴せて亡八こそは僞引ぬ却說歌川は情郎小川とはかり一人の母より花街を出るとすぐに夫婦となす夫有ゆへ下地馴染の客の外はさらに招く客有りとも自今其事許し下さるまじ別して麼下の士たる人などは至ッて譯有る事町人百姓はまたしも士人に迎られなば女が一命は素より連累は皆親方へかゝり劍難の害必定遁がたし必ず愼み士たる客は除け給へと母より親方へ告知らす云合は跡先と成り母は一途に小川を恨みしはかねて小川が微力なるに歌川が思ひ入し事うす〳〵聞居し事なるに目下の欲心にこゝろくらみしとはさらず文細〳〵認めおどしすかして云ひ送りけるが速母は廓に行右仁木がおしへの如く娘歌川事蝕客有て纔の嫉より歌川を無理殺しに欲我身も自害すると一心究覘居る事告げ知せし者有りと有りて年のかゝりし娘御寺の大上人に歎き金子百兩頂き來りしなり是を以て娘の年纔に一年怪我有りてはお互に後悔益なしと百兩を出して涙ながらに口說立る全盛の花魁百金などに換べきやうなし但し彼朝夕

の煙も絶々なるが百金より盜せしにもあらじ慈悲圓滿の知識などより頂戴來りしかなと必決し難く躊躇する所へ幇間の伊助來かゝりさしもの亡八を口車にて皷笛せしかば同じ穴とは夢にも知らぬ親方竟に百金にて事落着し夫より母方へ歌川を引取しかば小川に逢事道絶しに或黃昏まのびやかに小川來りしを母ちらと見るより人殺々々と呼吧近隣大きに騷ぎ段々物語を聞き殆事哉まかし怪我なくて目出たしなど此蹺蹊ゆへ小川とは文の通路も遂はぬ成り行なり時分よしと仁木母が許へ來り歌川に逢我大酒に前後を忘れ保殿山花見の折からは本心になき光景こそ恥けれ時に汝は內々聞く所小川と深く云かわせしよりなり然るに此小川放埒度々のうへ足利の御勘氣蒙り行衞ゑれず汝一端我云出せし詞を立て今より百ケ日予が心に順なば其後妹分にして長く小川と夫婦となし御勘氣御赦免願奉りつかはすべし只顧一應一二ケ月の際心に染ずとも我に堪納させ呉られなば我も武士なり婦女子を欺き僞るべきや誓て百ケ日の後は小川と汝と睦しく二世の契を結ばせ權門方の御執成を願ひ家妹婿となし片腕と頼み長く其後は緣者の睦をなさむ百日は夢の間なり是誠に武士の一端の初一念を空しくせざる意氣地を立る計にて家は實の妻子有事なれば執着恨ふがく長久の事を計るべきやと金子百兩ばかり兩人が前にさし置き歌川も馴ぬ住合の不自由思ひやる心置なく些少の志をうけて事濟今日は公用繁忙と兩人に暇乞して立ちかへる此佞人疾讒言して小川は逐放しかく欺きける慾心のみにて跡さきの勘辨なき母只顧すゝ

め百日過なば我暇とりそなたの願は母が必ず遂てやる孝行此うへもなき事亦生涯長き良人をもとむる基ひ此うへもなき果報人とはそなたの事なりなどかき口説かれ夫の浪人歸參させ長く妻婦となさむと云が嬉しくさもあらば百日を限跡は願の通に母の證人にて竟に事濟ぬ十郎兵衛は計課せ夫より歌川を母と引わけ譽庄四ッ目の谷へ風流つくせし一構へ奥ふかく機密ありて室堂轉動していつの間にか地中へ入と日の光りもさゝず燈燭をつらね夜の襖を設け美酒鮮肴肉を繙のごとく積み獸肉を啖ふ事狼の如し却説女を赤裸になし手足梆つけ晝夜の荒淫法外の所作譬は隋の煬帝の亂行に髣髴然るに足利公より台命の旨を奉じ管領より召れける故急周章て金殿へ登りける歌川は十分計られ今更悔とも脱出る事は扨おき母方への音信も遂ず夫より一兩日も過たる夕暮れ侍女傍へ來りて覺へなき女の名にて歌川殿へと文箱の上書よく〳〵見るに小川の手跡なれば嬉しく發き見れば仁木十郎兵衛が悪計にて御勘氣蒙りしかど幸ひ日頃射術師範下されし應對衛合衆增字一殿の仁心密策を以て今夜九ッの頃伺ひ竊組の伊田某と某汝を救ひ出し仁木が積悪をも糺すべき手段有り今宵三更を待べし素より伊田派のまのびは鐵城の内に匿れ有るとも袋の中の物を取り出すがごとし但し汝が髪の毛一筋行ふ術に入用のよしなれば髪の毛を封じ此文箱に入れ此使の小女に渡すべし人目にかゝらば一大事返事に及ばず髪筋ばかり封じ速く此少女に差越すべし万苦千辛むかし語りとなるの始は今夜三更を待べしとまがふ方なき夫の手跡天

にも昇る　しさ返事もと思へども人目にかゝりなばと何氣なく其使の女中是へと呼つがせ髪三筋引ぬきとくと封じ文箱に收め小女に渡し仰に任せ御返事は致し申さず仰の品は御使へ進じ候らふ此よりよきに御告し御くろうと會釋し奥へ入んとする所へ生憎や仁木十郎兵衛慌忙歸り來り使は目立ぬ少女の事なればさして咎べきにもあらぬ有べきかゝりなれば穩ならば何の心もつくまじきに疵もつ足一大事を抱殊に懷中に密書有り狐疑ふかく姦智勝れし怖しき仁木白眼巡す頻つき魂天外に飛ごとく面色忽蕪茹たるが如く丈人何が故に來り給ふと不審き物言ひ狼狽たる有りさま十郎兵衛早く推し其少女何方よりの使なりやと問ふ早速の答出ず否遁は〳〵ばかり言葉澁りて分らず使其方は何方某殿よりの使ぞと尋るに是も否遁はと〳〵ばかりゝ仁木怒り文箱奪ひ取て其裡を見に狀文はなく小さく封じたる物有り發見るに時既に黄昏なれば二筋三毫の髪髦目にもかゝらず彌々怪しみ是必す來由有べし隱さず白地に告たらば宥して仔細なく濟べし少しにても文り僞なば忽首と手と足と所をかへべし有の儘に告よと云方機いや母の方より久しく音信なき故使來りしなりと云ふ夫なれば何の仔細なき事を其駭きし顔色心得ず母より何といふ狀文來りしや否狀文は來らず使は口狀のみなり口叙ばかりにて濟事に文箱は何事ぞ否實は文來りしなりされど丈夫には示し難し只願此義は御見捨下さるべし見捨るも見つぐも母が子の方へ告來こと何事にもせよ匿すべき道理なし文脉はまづ何事か有る一覽すべし否御覽に備ら

れぬ用事なり御覽あらば御愛想つきなんと憚り態と御目にかけ不申夫は何とも理會の行ぬ分説善惡とも隱すは心に一物有るなり隱すべき譯有とも明に我に告て疑をはらすべし然らば告べし實は母より無心申來りしなり過分の御心づけ有るうて八重に欲ふかく黑心ものと御さげすみ有んかと憚りて心擾亂さしたる事もなき事を仔細有りげに御不審受めいわく致したると纔々とさも有げに分説十郎兵衞夫ならばいらざる遠慮なり金子入用ならば送り遣すべし何程入用と申來りしぞまづ母の文見せ候へと懷中へ手を入られ絶躰絶命難禦と傍なる火鉢へ打込たり忽見焰々と燃揚り灰と成りて飛散たり短氣憤激怒り心頭より起り髻抓て迫と惹伏冰の刃膽尖を突つらぬさ血烟り迸る鮮血突捨て逃け巡り叫ぶ少女を追首筋を抓で膝の下に引しき女め何國より何用有て密事の使に來たりしぞ有りやうに吐ずば賣女めが相伴させむ返答せよとひしぎ付るに少女もさる曲者と見へ舌喰切て息絶たり兩人を斃せし上密書は焚たり手がゝりは亡晦氣千々事かな必ず小川めが方より勾引す方便ならむ及ばぬ事なりしかし可惜花をちゝし許多の黃金を拋て百日の後は必ず別離を與と計しが實となりしは冥告しか何にもせよ晦氣事かなと快々として胸塞りぬれど爲方もなし不題話説小川は歌川が囘を俟髮毫を術者に渡し今夜三更には女を奪ひ姦人仁木に糺さむと心燥焦まてども〳〵使の婢歸り來らず時刻二更に向々として音信なし是必ず密謀漏たると見へたりと心轉動し此由增野と術者とに商量す術者嗟歎良久て可惜々々歌

川君は毒手に斃れ婢も連累となりぬ可憐事此上もなし然密計は些も漏れず歌川君の怨恨今術を以て荷膽し速に仁木が肉族を微塵粉々となさむと呪文を唱へ神符を仁木が第宅の邊にて焚其灰を煽ぎ入れ各位立歸りける且説仁木は宵の騷に心胸塞り煩忌に大に醉ひ例れ三更の頃まて寢所にて憩しが肚何とやらむ挽締るやうに覺へ連々つよくなるゆへ探り見れば丸き帶を累々ともなく捲たり手囘の者の介抱の爲にかくせしか餘り强く締たり解捨んと熟鑒白蛇なり大きに駭き誰よ渠よと叫んと爲に疾腋下より喉まて捲付たれば隻息になりて聲を呑少しも言事遂はずかゝれ共强氣の仁木なれば枕に立たる短刀ぬき取蛇の卷たる儘に竪さまに三刀四刀强く斬れども燈心などにて鐵丸を撫るが如く依然として愈々つよく疼却て手定ざれば刀は外れ〳〵其度其度に腹も胸も我と己手に何個ともなく挽疾うけ血は涿々として流れ蛇の噴毒氣は疵口より五臟に浸渡たりしや肚の裡の惡痛その悶苦しむ事何に譬む物なし吸息なれば言事も叫にさへ聲無く虛空を掴み地に倒れ跑走狂ひ巡り柱に眉間を打あて流るゝ血眼に入顚倒しては蒐繞揚躍蹂躙三日三夜かくの如くにして遍身紫色に變じ九穴あり漓々と血流れ骨節碎て死たりける十五才の男子有り是も實子に非ず姪なり日頃の行跡を疎み歷家なれ共妻室もなく此子亦見るを見眞似と父に劣らぬ非道の質なりしが父と同時に是も白き小蛇側に在て晝夜飛付〳〵竟に三日めに親子共に狂ひ死たり平日同席の麾下の列位評判あしく親族すべて疎み果し事なれば家名斷絶に及び

ぬ嗟權門歴家の氏族足利公の御麾下家富て威勢ゆゝしきに放逸不仁緩怠無禮荒淫法外の驕奢の成行不時の眚災來りて身も家も滅亡せしは愼むべき事なりと人々恐れ且萬人指頭の嘲りをうけ名家に瑕つけ死後汚名を蒙る此惡業未來の程また惡趣に墮せん事必定なり淺猿かりし事共なり

祐天師の御廻向をうけ死靈解説の事

不題説話祐天師は六角圓通菩薩の靈告を蒙り給ひ一人にても多く濟度なすべき沙門の本意を怠り參詣の人々に怪我もあらんかと夜陰の説法を止しとそ過ちなれ生死の第一大事晝夜のわかち有べきや人數を増て群集を制し扶しめ我は未明より法談の座へ出て參詣の人々へ十念を授け又は回向をなさんと夫より下地を傳へ高藪をひらき路筋を濶く造り參りの人數は右方進ませ左の方へ下向の多勢を流し給へば少しも混亂せず老幼足弱安らかにして御即智を人々感じける此法は原そのかみ石山合戰の時三軍に命を司とり鬼谷子が傳を以て顯如大上人を擁護なし奉りし大信心の御門徒鈴木重幸が軍勢を繰吊楠だての軍法にて今の代も廣大の人數の往反左右へ分ちぬる事祐天師より始りぬ淀與惣右衛門といふ勘辨者大阪淀川筋十里〇際三十石上下の舟繩にて曳く事差ゝる事にてもなけれ共餘り手近くて萬世辨到の手[illegible]の付し人もなきに秘事の眼は

不易の調法となれり扨かゝりしかば日々夜々貴賤老若男女僧俗の參り下向夥しともいはん方なし其の中には種々の常ならぬ事とも限りなし譬ば下總の國岡田郷埴生村百姓與右衛門が妻累が靈魂成佛の事（くわしく累解脫物がたりといふ書に有り）是等は世に普く知る事なり其普く人々の知らざる事跡正しき靈驗奇瑞許多なり爰に擔通上人怪しき夢を見給ふ齡廿ばかりの美女二人ばかりの少女枕に立さゞ〳〵とかき口説うち歎き願ひいるは妾は遊女歌川と申流れの女又是なるは夫方より使として來し女兩人とも仁木十郎兵衛と申す惡人に非業の劍に死し候ひつる此怨恨は助力の術者有てはや恨ははらし候しかるに此の仁木我々が屍を一つに梆大河へ捨させしに鎌倉と下總の界なる京極橋の杭に羅り有て大石をつけ沈しかば水底に尸を腐し日夜變りゆく尸繩となりて中有にさまよひ種々の苦患をうけさらふ適祐天上人の御十念をうけ回向を蒙り渠死骸を尋常の葬をうけなば成佛うたがひなく候葬式の事は夫さふらふゆへいかやうともいたし候へども其死骸京極橋の杭にかゝり水底に有る事存知もうさず告げ知らす事は修羅の鬼彼仁木親子か死靈と挑み鬪ひ中々親族には告る事遂申さず又祐天上人に告奉らむとするに中有に迷ふ鬼修羅の眷屬充滿たれば事を訴ふるの由なし御師範といひ大慈の擔通上人ひとへに此苦患を助けしめ給ひ祐天知識の御回向を得せしめ給ひなば世に有難き洪恩ならむと連夜の夢の告捨がたく祐天子に此よし命せられ疾渠亡靈解脫の功をあらはし給へと懇に仰られしかば祐

天子はやがて京極橋に至り大施餓鬼を修行し給ふにぞ遠近是を拜まむと群集す爰に小川某は增野殿の扶助にて竟に仁木が讒言たる事顯れ歸參御勘氣高免美名を揚げ仇家も斷絶し心にかゝる雲は霽たれ共歌川が寃刑に死したる事旦昏胸塞りしがけふしも生菩薩祐天上人の京極はしにて無緣大施餓鬼有とき丶亡妻が菩提の爲め爰に詣來りける去程に師は帷幄の内より法衣を整へ數多の僧衆前後に圍繞し名香異馥芬々として磬鼓鉦鐃浪に響き續經の同音雲に答へいか成中有に漂ひ迷ふ惡靈怨鬼なりとも忽ち得脫し生天の善果を蒙りなむとぞみへにける斯て上人高らかに唱へ給ふは俗名小川某の妻女歌川事法號惠室智光信女無量罪即滅佛果菩提のためと高聲に御十念を水面に向て授給へば數百の御弟子億萬の人々同音に南無阿彌陀佛々々と稱名なしければ不思議や浪たち渦卷上り夕日に映ずる水面紫の雨霧靄虛空に花ふり水上に歌川が有し姿合掌し莞爾とうち咲上人を禮拜し夫小川の方を拜し九霄遙かに昇と見へしが忽光明赫燿たる紫雲につれてのぼりし跡異香薰じ花降事雪の飛がごとし（此花降といふは紫雲風にちるに光明のかゞやきて閃々と映るは花のふるごときをいふなり）是を見聞せし貴賤老若男女僧俗天堂の有さま目前におがみつけし有がたさ感涙袖に餘りける無緣の人々猶かくのごとし況や夫小川愛妻非業の刃に死し其遺尸さへ定かならず歎き沈みしに目下此光景を拜し事有難しとも忝しとも何に譬ん嬉さに人目も忘れ上人の御まへに合掌し大聲揚て泣入しは理り至極と知る人は感じあへり此小川

も是より致仕して御弟子となり所謂八知識の其一人寛譽有覺上人と聞へしは此小川氏の事なり是こそ佛種は緣より起るとも煩惱即菩提とも申べかりける善緣なりさればあしく着すれは繫念無量業一念五百生流轉して黑闇の迷路に胸を焦し戀慕の炎に心神を燒爛し永刼うかむ時なきぞ悲しけれ了悟ば十方光明即心則佛小川氏の如し是しかしながら末世稀有の大導師祐天大上人出世し給ひしによりかくの如し末世といへとも佛法不測凡慮をもて兎角を論ぜむ事愚痴の至りなりと心有人々は生得し明々照々たる佛心を曉しける

祐天上人一代記卷之五終

祐天上人一代記卷之六

勇士の怨恨祟をなすを祐天上人解脫成佛なさしめ給ふ事

山名伊豆守恒玄侯は鎌倉の呢近鶴の間詰の諸侯の内にても管領方金吾殿の婿にてひとしほ威勢目を驚しける然るに此山名の第營は松ケ谷津鴨仲丁なり阿波山屋敷とひとしく鎌倉谷七郷に隱れなき濶き地面ゆへ等持院殿の御とき舊領江州長濱在城の時先祖高恒領分余吾の行市山へ人部を遣し築山泉水の立岩磐賓主の石の組合に成べき岩石を其道の功者をつかはし點檢させて數十個小石中石沙をはじめ大く取よせ宅地の庭へ移し猶又大澤村の上なる岩崎山大岩山などの山土を夥しく掘とらせ運ばせ假山とは云ながら實の樹の如し樹木もさま〳〵嵲曲にして珍らしきを數株うつし植させられける其ころよりは遙に星うつり霜換りし今に至り此家に一ッの不思議有高恒壯年にして狂氣し故なくして切腹して死す其子某十九才の時戰場に討死し子なくして叔父某伊豆守に任ぜられしに壯年にして頓死せらる當代迄血脈相續といふ事なし代々養子なり夫さへ舉三十前後にて死す亦近江より當地へ彼地面に有し假山を崩し木立岩組すべて舊形の通り再造營せられけるがむかしより今に至り三月に至れば彼築山雨降夜は震動し樹木鳴

泉水の面浪立湧上り鬼哭する事例年なり家中一統殿をはじめ下丁に至り愼恐れて覗見る事をふかく禁制したまふ昔よりかくのごとし偶何ぞ我第宅の庭に據棲うへは當家の眷屬なり其部下につらなり鬼神なればとて其主たるを犯すべきや强て祟らば假山を打崩し岩石すべて掘捨山はなくして平地となし泉水は埋て潰すべしなど武威盛んなる將又は邪は正に敵せずなど文學誇の將など先祖の内に在しは皆横死劔難亂心發狂して果たまふ况や家中の士など三月中は晝夜とも彼庭には假初にも逝事なし然るに今年二月下旬伊豆守殿の夢に爽に甲たる武者二騎全身朱に染物の具の毛も紅に成たるが聲最苦しげに當家先祖我らに不禮緩怠にせしにより其鬱憤を懷く事今に晴事なし我々又今に修羅の眷屬となり苦患嘗るに物なし然れ共是を解脫せむ事遂わず時なる哉今や陽間に大導師祐天大上人出現有て此利益を蒙る們佛果を得ずといふ事なし故に侯の助力を假り渠祐天知識の回向をうけ奉り修羅道の苦を扳安養淨土の快樂を蒙らしめ給はば侯の洪恩何ぞ歡喜せざらん然らば當家果して武運長久長壽ならまめん必頼托まいらするなりと涙とゝもに物語るうち八つの鼓聞ゆるにぞ面を覩合すわや修羅鬪爭の時こそ來れりいざ戰場に馳むかひ勝負を決すべしと今迄水魚の交りと見へしが忽ち顏色變じ憤怒の悪相鬼魅のごとく疾事風のごとく庭前の假山の方へ逝と見るに金鼓の聲鬨聲矢玉の響人馬の馳違ふ音泰山も搖がごとく聞ゆると見しは夢か現か覺てもさらに夢とは想われず扨〳〵今少しの事其姓名も聞得

ずいつの代いかなる役に討死在し戰將にや遺念の至り此事なりと深く案し煩ひ給ひしが其夜再告や有なんと齊戒沐浴し香を焚烏帽子大紋の直垂四品侍從の公服を穿端坐して待給ふ三更傾き し頃夜嵐烈しく假山の方より一團の陰火燃出こなたゑ來るとひとしく跡より同じく燐火逐來り室に入て火は消前夜の兵　恭しく首を低俟の好意兩士殆と感心仕りぬ平なる時はかく骨肉同胞の如しといへとも修羅の刻限來ると戰場にくるしむ形跡を見哀と覺し賜ふべし今俟に見せ奉る光景日に三度夜に三度毎日毎月日々夜億万刧經るとも連綿としてかくのごとし此苦痛を解脫なしてたび給ふは祐天大上人施主大檀那は　酒　尊俟より外たのむ方なく我〳〵が物の具毛覗よく〳〵なしてたべ姓名は朗かに御聽に達すへし淺猿きは修羅の眷屬闘しきつかの間も心寛ならず早時刻も近く頃ゆへ何事も闘戰の有さまにて推量下さるべし紺糸の鎧に同し毛の天衝の盔は某なり又大荒目の鎧紅糸の鍬に金の三ッ菖蒲の前立は某なり再見參には入難し只顧御　吊待奉るといふうち天地震動し押皷螺吹き立てる山おろし假山忽ち泰山と變じ天正十一年三月上旬のけしきとかわる庭の面羽柴久吉　平　左少將殿の大軍番手を定め岩崎山へと押ゆく先手は筒井伊賀入道順慶堀久大郎秀政行市山の佐久間盛政の本陣に押よせ関を突と上たりける北國勢も関を合せ諸手亂軍となり賤ヶ嶽の尾崎より大崩し七頭八倒鼎の湧がごとし佐久間源六政頼同政次が　も敗れ羽柴の大軍飯の浦より押かゝり北國方長井甚見原青木の陣々も碎敗れぬ拜鄕久盈原彦

次郎　殿　して喰付來る多勢を右往左往ゑ突落し三騎五騎串ざしに貫く六尺餘りの長穂血は滾々と滴るを打ふり〳〵電光の如く喚き叫ぶ憤聲猛虎の吼るもかくやらん戸ヶ嶽の近邊切所〳〵に構たる廿餘ヶ所の砦より一同に関を作り切出平塲に陣せし是角生駒黒坐舞田の諸將家々の旗さし物夜嵐に吹なびかせ同しく鯨波を上討出貫つけ渦卷立たる數万の軍兵隊伍　乱　敵味方の討死屍巒をつき鮮血河となりさらに目にも認ず七里半の山中を谷へまくり落され峰へ敗走し足の踏所も　魂　は天外に飛たれば打倒れ柳ヶ瀬の方へ逃るも有天神山の尾崎より大音村へ崩れ行も有討つうたれつ突違へ馬蹄に蹴倒され亂炮にうち倒され重手の主を肩にかけ引も有されど名を惜み義を守る勇士は亂軍の内に討死す爰に白木の杜の破口より烏驄の馬にのり白星の兜に天衝の勝れて高きを猪首に着四尺斗の大身の鎗を捻り勝誇りたる上方勢を　瞬　うちに七八騎突おとし鎗切折れ打物を電光の如く打ふり大音あげ柴田權六勝久か手金澤六藏と名乘血の波揚て切立る堀筒井勢さん〳〵に打敗られまらみて見へし其所へ錆駿の馬に跨り十文字の鎧りう〳〵と打ふり大荒目の鎧に金の三ッ菖蒲の前立し紅糸の鍬の盔を着たる武者後陣より一文字に馳せ來り物〳〵しや金澤桑山修理亮が手内藤丹下參りそふと金澤に突かゝる互に秘術を盡し戰ふ内金澤弓手の肩尖突通され馬より眞倒に落るを得たりと突下す丹下が鎧の柄引抓み引落されし内藤に組付たり内藤も鎧をすて上を下へと揉合組ながら谷底へころび落竟に金澤を組しき短刀引拔首を

錘と眉庇抓て引仰向る内下より金澤内藤が喉より首筋へ突通すと首搔と一時にてうち重りて死したりける此所右は谷ふかく左は山峻しく一騎うちの細道さへなく萱原小笹彌生に茂りたる中へ倒落し處に山上の燒討砦の烟燼となりし燒木谷へ落かゝり夜風谷風萱に燃つき谷底一面火河となる所々の動搖勝鬨の音山彦空響し須彌の四維も碎け今輪際も振ふかと聞へしと松濤颯々朝嵐田上山に輝し千生瓢箪の金色も旭さし入館の内に眠りは覺し正夢の光景往事を熟思に江州大岩山の前後より岩石土沙を運び取りし時金澤内藤兩勇士の討死せし屍谷底に埋れし義勇美名も働も亂軍の中口牌にだに傳らず嘸や本意なく有べし然るうへに屍を堀露燒爛て形も定安ならざるが土沙に埋れ朽たるとも知らず遊興の爲に翫弄せしゆへ鬼神の如き慣死の怨魄さてこそ是は邪祟せしは理り至極なり今時來り此事朗に知覺せしうへは兩勇士の望果さずんば有べからずと此由來くはしく新館御所へ上聞に達せられしかば甚奇特に思し召担道師へ祐天をして山名が宅地の勇士の怨靈を追善回向致すべしとの仰にて三月二日より山名伊豆守殿津嶋のやしきにて修行なし給ふ殊さら御所よりの御命といひ其修法いふもさらなり果して兩勇士修羅闘爭の苦しみ一時に解脱し天生界に往生せし有さま現に見聞せられし山名侯御所へ言上あられしかば上にも末世不思議の名僧かなと御皈依淺からざりける此と諸侯のかた〳〵御聞傳へありて彼方此方の尊崇はたぐひなく聞へけり

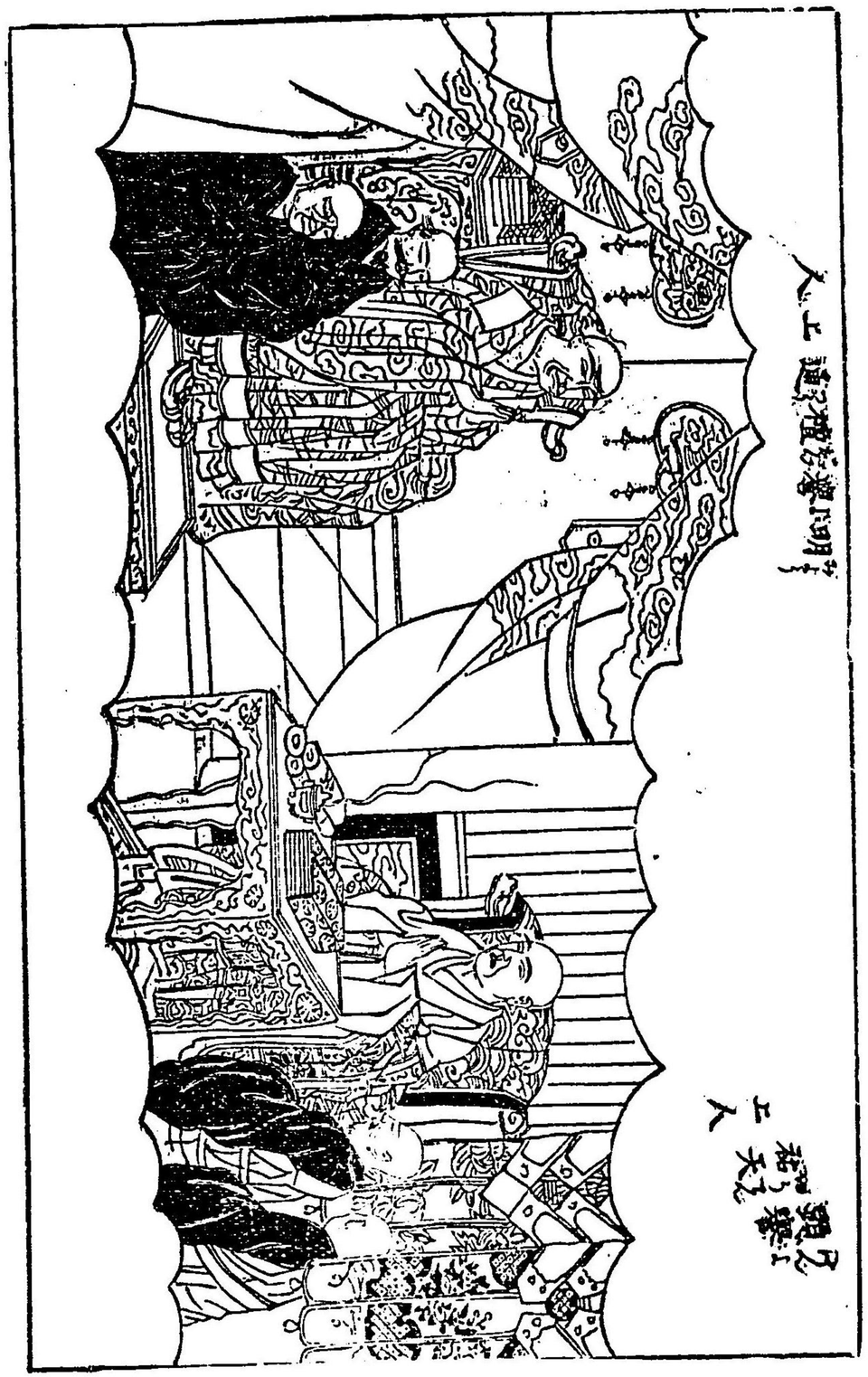
山伏龍海が幻術祐天上人と法力を競る事

兩雄相拒でともにならび立ざると己に勝るを嫉は古今の通情なり又自己の好とを悅ぶ人有時は親疎をいわず心和暢し其好道々に遊是は道をともにし信を通ずる事さるべき事なり渠同じ道の達者あらば歡び親しみ己に勝らば麒尾に服て共に其淵玄に入己に及ばざるは誘引して共に三昧にいるこそ其道〳〵の道なるにいかなれば角ひ妬み自己獨立して万億兆の信仰をとらむと我慢の甚きこそ不審けれ爰に畠山道朝入道は元來活潑的氣象假令にも柔軟なる事は婦女子の見と看破て只顧利刀瓜を割がごとき事のみを欣ぶ日頃の氣質なれば頃日貴賤ともに祐天子を生如來のごとくに震動して歸依する事を深く嘲り激しいかに今天下昇平万民皷腹の時なればとて匹夫下賤の一文不通の土芥の奴原は是非なし文雅に渉り況や武威覇業を以て四夷八蠻をも打靡け權道を逞しては道の道とする常の道は放下し其道を遺れしぞならば君をも討べし周の文王是なり親をも跳殺すべし妻子をも砍べし億兆の人命を斷て天下を安ずべきぞ武の樞鈕なるべきに柔和忍辱などゝ劍刀を横たへ斧戟を執武士の身として祐天賣僧に狐惑せらるゝ馬鹿諸侯一班を殿中にて頬の皮剝擘ば響かせ御所寶篋院殿をも撓て泡を噴せくれんずと其豫備して序を俟こそ我慢なれ却話既爰に彌生の孟より寶篋院殿の御妹君繁子方怪しき病にそみ給ふ邪祟にて大熱煩

閑なし給ふ昵近晝夜の伺候典藥御祈禱のこる所なし祐天僧都へと御禱の事御前へ召せられ仰合られける時祐天子相見奉り御容躰を拜し候處祈念にも禱にも不及當月ハはや今日廿八日なり晩春の氣候さへ過四月朔日孟夏の時候にうつり候はゞ自ら御全快疑ひなし日出度き御事なり御違例は今一兩日なり卯月朔日寅の一天に至らば悉除のみならず御氣色日頃よりは壯健にましますなり故に祐天などの祈願に嗚呼がましく修行せんよりやがて自然の御全快こそ一入うるはしけれと未萌を示す知識の確言は定て相違も有まじなれ共御熱は經に深く入往來また期を定めず頗邪祟にひとしくして左にもあらず何は兎もあれ佛學經論こそ精しかるべけれ醫療治方の事さし出がましき分説哉と典藥中の言上には姫の御容躰は御熱甚深重にして速に解し冷寒の御藥などは獻りがたし緩急の際調劑宿學功者の老醫何れも中〳〵一旬日などに解熱の手段なく況や御全快を一兩日などゝは胡亂なる放言畢竟素人の事一途に速に御平愈を庶幾心より祝し奉りて言上せしか或は御心を沉塞まじき氣轉か是等の沒來口説取に足らず何分此上涼劑を以て沈伏鬱滯の熱を解醒の醫論區々なり爰に管領斯波義敏のはからひとして都より典藥の頭丹波の賴久を先達て招證せられける鎌倉の御威勢京より遙の路を五日の着の日積り是とても四月二日の夜に入へし夫迄の急變も有べきかと昵近外様の大小名外に御快氣の方便もなくせん方もなし程なく三月晦日の夜に入御熱焚が如し上下の騷擾鼎の沸湯にひとし御皈依の担通上人も祐

天も伺として參り居られける典藥中餘りの麁忽出家にんざる面前誤後日に口發さぬ爲恥いらすべしと祐天子を招き此御容躰いかに知識奈何あると十人師の顏色を白眼つ笑つ詰る光景師は拍手して善哉〳〵例位もいよ〳〵恐悅貧道は頃日より伺置し事故更に今恐悅を伸るに及ず知れたる御目出たなりと依然として騷がぬ躰典藥中も昵近衆も低語て祐天亂心せしなり詞少にして次へ退らるべしなどの蹺蹊ゆへ師は座を避給ふ例位這顚狂禿顱に拘事はなし此上は都典藥の頭の着あらば手段有べけれども追々の遠見注進中〳〵火急の間に合ずと云所へ奥御坊主衆罷出扨も典藥頭急御召により早追駕にて急の道中東海道下向遠江駿河の界の大堰川高水にて西の方金谷の山に添て水の少し落るを待處又々昨今の大雨東の方島田の驛一面水溢れければ當所への着先は急には人力の及ぶ所に非ず此雨なか〳〵四五日の中霽申まじけれは所詮今般の御用の路いかゝ有べき御賢慮廻らさるべしと聞て皆々力を落しぬ嚮より鎌倉を出君の仰を蒙り奉り昼夜御側に在て調劑に秘術をつくし工夫を煉る御醫師數多なれど其効奇驗なしかくて小田原評定に時刻うつり早東明の頃祐天子山名伊豆侯を以て一個の神符を獻り如是々々と密に言上有ける此事知る人更になし且上には山名の披露せし神符を旭に向ひ水に太陽の晃晧たる暑を映神符を燒姫君に與給ふといなや忽神氣爽にして邪熱は雪霜に熱湯を濺が如く昇る朝日とともに精神ます〳〵瞳暘一點の煩しき事なく卯月朔日院館營ながら衣更穿の祝禮をうけさせら

るへく盛服して御出座あれば滿堂の諸侯太夫はいふもさらなり第一は御醫師かた夢か現か何ことぞや泰越莩陀長沙とかゝる熱症かゝる快癒は論し給はず妙哉々々是につきても渠の祐天子は神人なり佛法弘法の導師のみならむや怖しき英物なりと舌を捲も理りなり且しゝほ芽出たき朔日の御禮滿座御佳儀告伸らる人々斯波畠山仁木一色佐々木山名曾川石堂吉良桃井河野結城の人々去にても今般今日なとかゝる珍重の御禮など思ひかけざる吉事かゝれば此後千万歳御氣色かわらせ給ふまじき上は實に神仙なりなど觀阿彌祝し奉れば擧万歳を唱ける上仰出さるゝは然り生老病死は期定難き凡慮の及ばぬ事醫術も遂ぬ事は云もさらなりしかは有ども治療の一事は醫官の關ところなり其曉らるべき醫師手を措がたきの異病洞察未然に是を識得せし祐天は醫學熟練せしにも有るまし奈何はかゝる妙有ぞと御尋誰か即答なし奉る人なし山名伊豆守恐ながら祐天醫術は知らずとも三世を見る天眼通なれば凡慮とは其見ところ別にして神に逼の場有てかくの如きかと自己の思量は斯存じ奉れども治博の確論猶精しく辨じ給へと一座を屹と見渡せば豫て期したる畠山道朝入道曰むかしより佞姦悪の毒物はすべて其勝れし能の人の及ばぬ術有物なり是獸の爪牙なり夫とも察せず一應の手段に狐惑せられ伏て信ずるは婦女子の類にて丈夫の泰然たる英雄の迷ふべき事に非ず祐天姦賊妖術を衒賣弄に假令に佛法の名を竊貴人長者を妖魅し擅に邪法を弘めぬ上の明かなるすらかくの如し碌々たる下賤の奴原擧魔道に誘引せ



らる畢竟天下を擾亂する幻術者渠永祿中南蠻より渉りし邪宗の門徒と見ゆるなり智德兼備の大禪師など丶一問答させ度物なりと山名に對して胡亂我慢の妄言を吐心は上を詰る賢君より勤功を積し補佐の老臣なればすべてかゝる失言聞あれども寛優なる上なればさして心となし給わず仰有けるは老人夫は一偏の論なり嚮に潮音とて快活國師など丶稱譽せし禪僧さま〳〵問答せしかど其正しき理明白なればこそさしもの潮音閉口せしならむ些少微塵の邪曲を合の機を認なば奈何ぞ潮音是を逃すべき活潑的雲門の一鞭を下して打破すへし敵するに虛なく其實また非ならざる故避しと見へたり又龍女擁護の事は譬祐天術有てかゝる奇驗を顯せしにもせよ頑愚囫圇なる下賤匹夫容易の手段にて善行に趣くべきや其人によつて作善奉行なさしめむが爲に假令に法術を施し或は閻羅城を目下に顯し天堂を即座に見せて懲惡勸善の種となすは所爲は外法是假なり實は正しきに歸する階梯なり難所を經て逝所安樂の地に趣く其路次なれば是に目をつけるは畢竟の根元をあらず枝葉を論ずる睛窄なり我軍法又あかり諸葛武侯水簾洞の鬼谷子孫腦また幻術にて敵を迷し名將僞りて神靈といひ佛陀の冥助と唱て人氣を一致にし心を決定なさしむ是神武なり妖術にて人を惑し自己を立むと計るは惡むへし假令にもちひて愚人を善所に誘ひ至善に勸め化し菩薩界へおもむかしむは祐天が弘法の爲濟度の爲に百計萬惹佛果に至らしめむと法の爲に粉骨して身を委ね善知識の方便凡庸の僧法師と拔群の手段感心餘り有各列左愚さずや

と利害明白私說なく微細に說譚なし給へば滿座君の高論實に左有べき事恐ながら毫髮の入べきなし正しきの說といふべしと言上せしかば偶中なりと笑はせ給ふ獨り道朝晦氣鬱腦事かなと思へども否といはれぬ理には敵し難く何にもせよ其道にそれ〳〵の術廢といふ事なく用べきの塲有と廣く見給ふぞならば其奇術も棄べからず祐天少しの小術有とも我師範凌雲院龍海御房とて役の小角の再生せし大驗者ます實は愚臣昔這奇術を微些習得候是も軍旅の一助とも用べき塲有べしと今上の御賢慮にも承うし鬼谷先生兵學の際に交られし心と同じ上の度量何事も用ゆへき必用有よしの高慮をうけ給はるうへは此事披露なし奉る然らば祐天も佛法の助けに是を用ゆとも却て其器の大なるゆへと云事今理會つかふまつらぬ左あらば是は佛法不思儀は離れ御前に於て上の御慰樂諸昵近の人々の目覺しに祐天の法力と我師龍海尊者の靈驗と其勝劣を競て上覽の興に備奉らむ祐天劣共佛子の事奇術は假令の即坐に愚人を勸化の爲ヨに輕く用事なれは貧しとも問答法論に閉口せしなどゝは違ひ少しも妨なし又龍海勝たらば生佛の祐天に何にもせよ勝し方ぞ超過上行なり用べき所有一派の豪傑ならむ然らば鎌倉の御所の御祈願所となし上にも召されて利益有へきなりと强て吹擧し天下の祈願所に申なし龍海に鴻恩を見せて役べき大望有內心こそ不敵なり上には心得ざる入道が告狀果して來由有へし今朝山名より献りし祐天子の神符どゝもに密書を內密にてさし上し書と符合せしかば上是を糺さむと何氣なき有さま

にて道めづらしき入道の思ひたちなり長き日のよき目覺しならむ而も此事彼法論などとかわ〻勝劣いづれに有とも恥辱とすべきにも有るまじければ其入道か親しき龍海とやらむをむか〻祐天にも担通にも申聞しなむ但し担通祐天から業の甚き佛子の本意ならずなと世界出塵にて強て辭退せば止るべしと強ち進み給わぬさまに仰出されしは入道が淵底探のふかき思し召とは知らず例の祐天荷膽とても龍海に一嚙にせらるゝ事明白なる故左右によせ表には進み裏は退き那厮めが滿坐に露なる恥を笑止に思すと見へたり遮莫いよ〳〵抓痒事かなと笑を含み台慮のごとく果して老實なる担通祐天かくべつ悅び術を衒事は致すまじ但席上の鹹畢竟上の御伽に支那震旦の不思議話を目前の所作にて告奉ると心得られよなどゝ入道參て一應は勸め候はむ甚困りし躰ならは其意に任せて御免下さるやう時の蹺蹊によりいかやうにても不妨さる事まづ〳〵一應は何となく申談じ候わむ龍海は兼て此事願望に候故是は御辭退は仕り候はじ先兩僧に談じ申候はむとさも穩に言上し御所を下り直に善導寺にいたり御所の嚴命にて明日龍海とやらむの山伏と祐天和尚と法力を競させよと何者が言上せしか異やう成嚴命いろ〳〵と愚老御止申上しかば御氣色以の外故無是非申入なり御辭退有ては首尾あしかるへし畢竟御遊興同事御吐し伽に參られしと思ひ參上然るべしと遁引ならず申渡す担通和尚恐れ入候へとも修驗者山伏と仰下さる方を相手取術を競し事も法問せし事に御座なく候山伏と申は役小角和州葛木山に入孔雀明

王の法を行ひ慈母を鐵鉢に入て入唐し給ひしなと奇異常ならぬ事を又流を汲行者違不思議の奇瑞祈りの靈妙他宗の及ばぬ法力なりかゝる驗者と立ならび祐天などの柔和に一文不通の族のみを勸來りし手段にて公なる席にて行力をくらべさせ上覽あらせられん御支度兩僧甚迷惑に存しめ蒐如としするに的る見事に公の席で負しとて法問などゝ違ひ誰が一人當宗の瑰瑋なりと云者はなし只得明日參殿必〳〵怠られな兩僧御うけのよし披露告なりと權威歷狀にかり切て云渡し祐天御うけの旨披露に及びしかばこは珍らしき事なりと拂曉より昵近の諸名家大小となく外樣の銘〳〵僧俗をいはず手に汗握て相つめしは錐立の界なれなし却説凌雲院龍海は前の管領畠山追朝が執奏にて御目見拜禮御盃頂戴御懇の御意を蒙り御前に於て祐天と法力をくらべ修驗者の行力と衆生濟度なす知識の德といづれに勝劣有とても双方遺恨なく將來は彌互に其受持せし法に信心を委べしとの御事なりと山名伊豆守龍海祐天に申渡されけるいづれ御懇の御意謹で御禮申上らる担通和尚は祐天後見として控られける畠山道朝入道兩僧に向ひ今日は上をはじめ列參の銘々佛學不案内の事なれば俗眼にも其勝劣の別る銘々の術を顯さるべしと屹と龍海を見る龍海爾示として小術を龜鑑に備奉らむさて祐天とは和僧かと眼を定て見るに神相志氣堂々として眼睛凛然光彩人を射頭上に紫の瑞氣充亦明晃々たる利劍の如き尖き殺氣を含然甚疑敷少から

ず那覩が相覩海内に兩個となき神通相何とも心得ぬ事かと往年縮伸神を胎内へ封じ込脱氣蕩精の病を行ひ一紀にして命期を斷事決定此秘法を解者當時覺なし奈何して免れ今祐天と果して震動するこそ理なれ遮莫已沒夜羅即魔君の秘法を修し精力をつくさば念佛稱名よりさして所作なき祐天恐るゝに足ずと。いかにや祐天子今我神通飛行の法を行ひ年來山上せし靈地〳〵へ一瞬の際に逝其所〳〵に印を遺後より人を其所々へ見屆につかはさるゝに舉數百里を隔し高山共なれば數日を經て往來も容易は成難し如此難所數日を經辛して方纔逝べしさる高山我年來荒行苦行せし山〳〵二三ヶ所ばかりまづ和州金峯山信州御嶽甲斐白峯伯耆大山此四個の高山に一瞬の際に逝印をのこし即時に又此所へ立歸るべし而後御下知をうけし人々右四個の靈山へ登り龍海が遺し置たる印に持歸りて上覽に備へ給へ凡神行速歩とむかしより云傳へし急足紂王の裴廉梁山泊の戴宗慶安の熊谷三郎兵衛など舉神行と稱する一日に日本の里數三十里に出ず然るに一刻暫時に數百里を隔し高山而も所々方々に僞りならぬ後日の證據をのこし來る事和僧かゝる神通有か無か我小術は目下に行ひ上覽に備べし是に劣らぬ奇術を見せ候へかしいかに〳〵と笑を含み置は上をはじめ滿座是取りもなをさず天狗なり怖ろしき山伏かなと深く感じ給ふ道朝入道笑坪に入面白し誠に幻泡影の術と違ひ實に其證據をのこし置其術に渉らぬ人をしてかしこに遺せし印を取得て歸らさしむるとは人間業にて遂わぬ事なりまづ其のこしおく證據とは遺

何奈なる物ぞ龍海云廼是なりと白帛の三尺計り有を出し筆を採て書了上に呈す是を看玉ふに文字とは見ゆれども古の鳥跡篆のごとく亦蝌蚪字の如く書せし三字曉しがたし龍海云今書を己自ら渠蛻々に今此の三字の書を杉の木に貼掛おくべし其跡を探り取しめ給へと再三個の帛に同じ書を摹し携上を拜し今即右四ヶの高山に逝直に飯歸候なりと再祐天師にむかひ和僧が奇特を見了て逝べし速く妙術を顯し給へと云祐天子貧道もまた其靈山に即今逝て同じく證を遺べし貴僧とならび逝べし一歩にても速を勝と定め後たるを劣とすべし此事奈何龍海云實に好競術なりさらば證を出し候へ承引と祐天師も同く白帛三尺ばかりなるに一個の文字を書して上に呈し給ひ今龍海とゝもに靈山四所へ飛行つかふまつり候後日人をして兩人が遺しおきたる書を探せ給ふ時の印は速き方の書を二にかけおき候なり山へ速く着し方痕の證にて明なりと言上なし給ふに上をはじめ勝負は格別是も劣らぬ通力なりとみな〳〵感じ給ふ龍海祐天子の書を看るに咒の梵字なり看了ていふさらば祐天子同伴申べし己先達せむと上を再拜し天にむかひ咒を唱へ鈴を振に其響鏘々鈌々とも辨ぜず總て闇夜となる事良久しうして方總晴朗にぞ上下驚き忽見祐天も龍海も其座になし不題說龍海は八重たちのぼる雲路をは弃筋の如く伸縮魅を役し給て飛行しまづ和丹金峯山の峰に至り見るに祐天未來大きに悅怡遯足飛顯いまだ來らず咲べし伸縮云渠蛻蝓の及ぶ所に非ずま

つ標札の書を貼べしと鬼に命じて杉の梢に高く掲、披いざ是より白峯へ逝んといふ所へ祐天師白龍に跨り來り給ふを見て伸縮鬼拍手して吧々呵々嗷々と笑事山谷も動ばかり龍海詰りて云大上人珍らしき風景を咏々て游覽し給ひしと見へてけしからぬ遲足かな公の勝負自己の慰樂は別に企給へと伸縮云行者は猜想もなき分説かな可憐祐天子心は一舉九万里に摶大鵬の如くなれ共駕の芋蝎の如き白地に蜒蜒にて如是と龍海實憐むべし〳〵と吼吽哈々咲ふ祐天子曰行ゞさのみ笑ひ給ふな疾己此所へ來り我印は遺しすぐに白峯へ逝又證を掛おき御嶽に至り同じく我書を殘し伯州大山へ逝今しるしを掲終りての歸路此所へ立寄しは推量機は行者も來り給ふべしと覗みればやう〳〵の事果して來駕を給ひしなり先眸子を定て精く覗給へ疾より祐天が書せし不動の字は掲貼おきたりと聞驚ながら一嵬うへの杉の枝に嚮に認し梵字かゝり有龍海は素鬼も愕然として半句一答に及ばず兩人一塊となりて動かず祐天子此上當山に用もなしゞづ立歸り此よし披露告べしと曰ふうちに霧立かさなり姿なし鬼の云何とも理會ゆかず果してのこり三個の山へ逝しは偽ならむと夫より白峯へ至れば疾不動の咒掛有り大きに怒りて烏黑に銷是で後日の證據にはならずと段々四ケの山へ飛行ては消して巡る却説祐天師と新館へ立歸り御前に出渠龍海が神行の法は東方朔が縮地の法なり貧道他が縮地の方を折却て那斷を眄慨の法に繋しを目下抵面上覽に備奉らむと空中に印を結び給へば豈量らんや御庭前の植込の東西

を盤桓と出沒嚮に己が書殘しえしれぬ三個の字を烏黑と筆もて塗いる頗いと惚たるさまに狼狽居るを見て道朝が仰天驚担通師の歡喜上の御感滿座の驚嘆其術の手段九牛が一毛なりと見へたりけり此場の落着下回に分解

祐天一代記卷之六　大見

明治廿九年十一月二十八日印刷
全廿九年十一月二十日發行
全廿一年三月廿三日發行
全廿三年四月廿五日發行
全廿四年五月廿六日發行
全廿五年六月廿七日發行
全廿六年八月廿八日發行
全廿七年九月廿九日發行
全廿八年十一月廿日發行
全廿九年十二月廿二日發行

高僧實傳典付
定價金六拾錢

編輯兼發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
發行者　田所定吉　東京市牛込區神樂町一丁目二番地
印刷者　翔鸞社井上印刷工場　東京市牛込區神樂町一丁目二番地
印刷所

版權所有

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

第十九編

校訂 並木宗輔淨瑠璃集

全壹冊

目次

○道成寺現在蛇鱗○苅萱桑門筑紫𨏍○釜淵雙級巴○本朝檀特山○日蓮記兒硯○楠昔噺○北條時頼記○那須與市西海硯○阿部宗任松浦鼓○丹生山田青海劍○後三年奥州軍記○攝津國長柄人柱○軍法富士見西行○一谷嫩軍記

第二十編

校訂 紀行文集

全壹冊

目次

◎東遊記 ◎東遊記後編
◎西遊記 ◎西遊記後編
◎日本行脚文集 ◎筑紫紀行
◎諸國軍人談 ◎奥の細道

第廿一編

校訂 一九全集

全壹冊

目次

○三浦雛波復讐 ○木鼬杜野狐復讐 ○松山奇談御杉小新話 ○北島女敵訓 ○笠の川森合噺 ○落話張次郎口 ○新吹 ○復讐奇談天橋立
○新製交島廻 ○衆家安全風出入 ○銘政宗刀珍說 ○忠信老媼餅 ○滑稽しつこなし ○落咄見世びらき ○歲年玉の卷 ○天橋立續編
○仙術獨稽古 ○爲物小遣帳 ○落延 ○善惡附込當座帳 ○用談しつこなし ○福助噺 ○通俗坐山夢 ○方言修行金草鞋

第廿二編

校訂 漂流奇談全集

全壹冊

◎雜粗漂流記◎臺灣漂客記事◎阿州船無人島漂流記◎口州船漂流記事◎蒔八打破船◎扁舟漂流記◎遠州船無人島物語◎竹内惣兵衛魯國漂流談◎志州船夢漂漂着記◎天竺物語◎南海記事◎當州人安南國漂流物語◎奥州 安南國漂流物語◎蓬州人唐國漂流記◎神昌丸魯國漂流始末◎島島語物◎山田仁左衛門渡唐錄◎天竺德兵衛物語◎無人島談話◎上州長平漂流口記◎無人島漂流口書◎南漂記◎德永丸漂流口書◎松前人韃靼漂流記◎漂客加祭哈出奔記◎督爽丸魯國漂流記◎永壽丸魯國漂流記◎薩州漂客見開錄◎ベッホ物語◎漂客壽三亞予舘◎亞墨新話◎漂客奇談◎紀州船米國漂流記

饗庭篁村翁校訂

近松時代淨瑠璃

本書目次

凱陣八島。國性爺後日合戰。文武五人男。大職冠。孕常盤 追加 源氏冷泉節。栬狩劔本地。釋迦如來誕生會。
國性爺合戰。唐船今國性爺。賀古教信七墓廻。曾我虎が石。平家女護島。浦島年代記。大原問答青葉笛。雪女五枚羽子板。
鎌田兵衛名所盃。孕常盤。大磯虎稚物語。曾我五人兄弟。當流小栗判官。松風村雨束帶鑑。持統天皇歌軍法。
以上廿二書合本。

全壹冊洋裝上製
背皮金文字入
正價金六拾錢
郵稅拾六錢

ナ 7-60

第拾四編 校訂

後太平記

全壹冊

太平記の後を承けて足利氏の末造應仁戰亂の時代を描き出す群雄四方に割據し天下亂れて麻の如く一仆一起小兒暗中に鬪ふの幕はこゝに信長秀吉に賴て打破せらるゝの光景正に太陽東に出で百鬼影を藏すの處讀むで一大劇を觀るの思ひあり

第拾五編

近松半二淨瑠璃集

全壹冊

目次

○役行者大峯櫻○奥州安達原○山城國畜生塚○京羽二重娘氣質○關寄待新田系圖○小夜中山鐘山寺○三日太平記○傾城阿波の鳴門○薩大名仰城敵討○東海道七里濱○道中龜山噺○新版歌祭文○時代繼室町錦繪○替唱糸の時雨

第拾七編 校訂

京山全集

全壹冊

目次

○腹佳話鶯鶯八藝○譽劍菱○復讐熊頓帶○女六部仇を宇津谷○小話娘柿樹○桃花流水○小櫻姫風月奇觀○早引說要集○江島御利生對管笠○五人女部の紅粉筆○花緣女敵討○高尾丸劍の稻妻○化粧坂懷忠龜鑑○奴勝山愛玉丹前○三國小女郎物語○隅田春藝者容氣○竹取物語○烟草十二抄○高尾考

第拾八編 校訂

落語全集

全壹冊

目次

○醒睡笑○鹿の卷筆○曾呂利語○曾呂利狂歌噺○臍の宿替○初音草大鑑○今藏花時○商賣百物語○輕口噺○噺の開帳○口拍子○落語笑吉茄登○輕口春の山○田舍莊子○壽藤葉羅井○狗樂新話○かるくちばなし○河童の尻子玉○噺物語○輕口浮瓢箪○落噺六義

180.28
H135ℓ
(10)
Ⓜ

015437-001-9

180.28-H135b

仏教各宗高僧実伝

大橋 新太郎／編

M39

ABC-1089